特集・多様化する教育環境と社会❹

◎家庭・学校・地域の連携への取組み

①『ひらかれた学校・大岡』の取組み～子ども、家庭・地域、教職員で創る新しい学校の姿～

■斉藤一弥

①『ひらかれた学校・大岡』の取組み～子ども、家庭・地域、教職員で創る新しい学校の姿～
②まちと共に歩み自分が輝くクラブ活動～子どもの存在を最優先する学校づくり～
③緑園都市スクールふれあいネット～地域イントラネットの活用～

1―はじめに～『ひらかれた学校・大岡』とは～
2―『ひらかれた学校』の教育活動への啓発
3―『ひらかれた学校』への地域教育力の活用
4―『ひらかれた学校』の教育活動への保護者・地域住民の参画
5―『ひらかれた学校』での教育活動の共同化
6―おわりに

1 はじめに ～『ひらかれた学校・大岡』とは～

本校は明治五年の学制発布に伴い「大岡学舎」として創設され、本年百二十七年目を迎える。学区は弘明寺観音の門前町として栄えた歴史的に古い地域で、戦争の空襲に遭わなかったこと、交通機関の発達とあいまって、弘明寺商店街を中心とする賑やかな商業地と大岡川沿いの静かな住宅地として発展してきた。学区および学区周辺には、横浜国立大学附属横浜中学校、横浜国立大学留学生会館・国際交流会館、県立大岡高等学校などがあり、南区役所、南図書館、大岡地区センター、大岡健康プラザ、南スポーツセンターなどの公共施設にも恵まれ、学習環境に適した環境である。また、学区には十七町内会があり、地域における諸活動が盛んに行われている。学校教育への理解も深く、協力的である。学校と地域の敬老会、消防団などの諸団体との結びつきも深く、学習活動への支援・参加にも前向きである。

このような環境のもと、これまで本校では、常に子どもの立場で教育課程の研究開発に取り組み、『ともに学びをきりひらいていく子どもの育成』を研究テーマとして子どもにとって豊かな教育活動の創造を目指してきている。そして、『求め続ける』『創り上げる』『共に生きる』という目指す子ども像の具現化に向けて、子ども自らが学びをきりひらき、周りの人々とともに豊かに生活を営み、子ども、家庭・地域、教職員の三者が互いにひらかれた関係の中で教育活動を展開していく『ひらかれた学校』づくりを推進している。子どもの豊かな学びと生活を求めていくためには、これまでの学校観の大幅な転換を図り、学校教育の在り方を様々な角度から見つめ直し、時間的、空間的、集団的、内容的な枠を可能な限り取り除いた新しいシステムでの教育環境を作り出すことが必要であると考えている。

以下では、本校が『ひらかれた学校・大岡』としての教育活動をどのように広め、推進しているかを示していく。

2 『ひらかれた学校』の教育活動への啓発

これまでの学校観から脱却し、新しい考え方での学校づくりを進めていくためには、学校教育を支えるそれぞれの立場の人々の意識改革が必要になってくる。特に、本校が求め

写真―1　大岡教育懇談会

ていく学校の在り方の実現には、家庭・地域との関係の強化や教育活動への協力および支援が不可欠になってくる。本校の教育活動の意図や内容について、家庭・地域に十分に説明し、理解していただくことが重要であると考えている。

❶―学校紹介『リーフレット』『学校だより』『教育懇談会』

保護者や地域の方々に、まず本校の『ひらかれた学校』のねらいと教育活動の内容や方向性を理解していただくことが重要であると考えている。教育に対する多様な見方、考え方がある中で、新しい学校の教育方針を明確にし、それを伝えたりするための機会をより多く設定し、本校なりの活動を支えていく環境づくりを進めてきた。

教育活動の基本的な考え方や方向性を簡潔に紹介するための『学校紹介リーフレット』（下参照）や、学校での行事や子どもたちの活動の様子を記し毎月発行する『学校だより』（下参照）を保護者や地域の方々に配布している。学校が積極的に情報発信をすることで学校側の考えを伝えていきたいと考えている。

また、保護者を対象とした年間三回程度の全校懇談会をはじめとして、子どもと地域の方々とが互いに語り合う『地区別教育懇談会』、年度の終わりに行われる大岡文化祭と同時開催され、子ども、保護者、地域住民、教育関係者、教職員などによってテーマ別に討論する『大岡教育懇談会（前頁写真―1）』などを行っている。学校側からの一方的な意思伝達に終わらないように互いの意見を交換する場として、また子どもも含めた互いの考えを認め合う場として重要視している。

❷―学校公開『オープンスクールデー』『来て！見て！やって！週間』

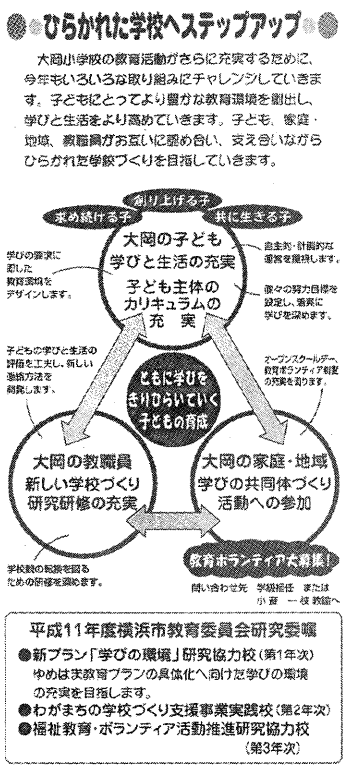
教育活動を理解していただくためには、学校教育活動そのものの公開も欠かせない。第一・第三土曜日は、『オープンスクールデー』として全校を公開している。学年懇談会や親子が一緒に企画・運営する「めだかっ子集会」の実施、各種実行委員会の公開、保護者や地域住民との諸行事の共同練習などを位置付けている。毎月のオープンスクールデーの予定は、『オープンスクールデーだより』に示して、各家庭だけでなく、地域の掲示板や回覧版でも紹介している。

また、年間二回程度、一週間を丸ごと公開する『来て！見て！やって！週間』を試みている。朝から放課後まで、しかも一週間のいずれの時間帯でも学校を公開し、あらゆる角度での活動にも参観していただける機会を設定している。子どもたちが特に参観してほしい内容については、『来て！見て！やって！週間だより』にて宣伝し、ともに活動できるように工夫している。仕事を持っている保護者などには時間的に幅のある公開は大変好評で、このような機会の拡大も検討している。

これらの取組みは、いずれも実際の子どもたちの学びの様子を見ていただくことで『ひらかれた学校』の教育活動の意図をつかんでいただくためのもので、学校が外にひらく試みとして大切なことである。

学校だより

学校紹介リーフレット（表）



3　『ひらかれた学校』への地域教育力の活用

❶―『総合的な学習』での協力依頼

本校では平成八年度より、教育課程の一部に『総合的な単元』を位置付け、総合学習を展開している。そこでの実践を通して、子どもたちの学びは、教科枠も、時間枠も、そして空間枠も越えて広がることを確認してきている。特に、学びの対象は学校内では収まらないことが多く、まちに飛び出して様々な人と出会ったり、いろいろな事象と関わったりしている。

六年生の子どもたちが本校裏手を流れる大岡川の環境美化活動に取り組んだ際、活動そのものに地域住民から思わぬ反対の声が上がったことがあった。プロムナードに美化活動の一環としてごみ箱を設置したことに、地域の敬老会が逆に周辺環境が悪化するという考えを投げかけてきたのである。活動に自信をもっていた子どもたちは思わぬ壁に直面したが、日頃からお世話になっている連合町内会長さんにご相談し、解決の方向性を示唆いただくことになった。さらに、活動の価値を高く評価してくださった会長さんが、地域の環境浄化運動への関心を高めるきっかけを町内に投げかけてくださったり、行政へも積極的に働きかけ、川岸にキショウブを植える活動を推進してくださったりしたこともあった。学校での子どもたちの取組みが広く地域活動に広がりを見せていくことは、これからの学校教育の大切な取組みの一つをとらえている。

このように総合学習では子どもたちの関心事が多岐に及ぶため、地域の方々のご理解やご支援は欠かせない。消防団や敬老会の方々の取組みの様子に関心をもち、それらを取材したり、実際に活動に参加させていただいたり、また地域のケアプラザや障害者の作業所などを訪問して、様々な仕事に取り組んでおられる方々との交流などにも活動が広がっていくことが多い。このような活動をより充実させ、学びの価値を高めていくためにも地域との交流は不可欠である。前述の『学校紹介リーフレット』等を配布したり、懇談会を頻繁に開催したりして学校の教育活動の趣旨説明を十分に行い、積極的に関わっていただくような工夫を進めている。

❷―教育ボランティア制度の重視

前述の通り、本校では教育活動への地域教育力の活用を大切にしている。特に、『教育ボランティア制度』を導入して教育活動に直接かかわっていただくことを推進している。年間延べ二百人以上の方々にご協力をいただき、日常の様々な活動へ支援していただいている。

『まち探検』で商店街の饅頭屋さんに関心をもった三年生の子どもたちが、実際に饅頭を作りたいと願った学習では、弘明寺商店街の和菓子屋のご主人においでいただき、作り方をご指導いただいた。本物を作ることの難しさや職人さんの仕事に対する思いを知ることになった。保護者のボランティアも含めて多くの方々の協力を得ながら、子ども達の願いの実現に向けた取組みを進めるようにしている（写真―2）。

また、『人体の仕組み』について学習を進めていた六年生の子どもたちは、自分たちの体のメカニズムをより詳しく知りたいという願いをもち、外科医の保護者に学校においでいただき、自分たちの疑問に答えていただいたり、書物などでは知り得なかった情報を得ることができた。

これらの取組みは、いずれの場合も子どもたちのより豊かな学びを創造するために欠かせない取組みであり、今後も一層重視していく必要がある。

4　『ひらかれた学校』の教育活動への保護者・地域住民の参画

本校では、教育活動をプランニングする段階から保護者や地域の方々に参画していただくような取組みを推進している。様々な教育活動に単に参加していただくだけでなく、活動の意義や方向性について共に考えたり、いろいろな角度からのご意見をいただいたりしている。学校と地域とが互いにひらかれた関係で教育を支えていくには、子どもと家庭・地域、さらには教職員の三者の計画段階から同軸化が大切であると考えている。

❶―『大岡スポーツフェスティバル』『大岡文化祭』での共同企画・運営

本校の行事の多くは、児童の年間計画委員会での話し合いによって決定され、それぞれの実行委員会が中心となって計画・運営していく。『大岡スポーツフェスティバル』『大岡文化祭』などの行事では、企画段階で保護者

写真―2　饅頭作り

学校紹介リーフレット（内）

・地域の方々にアンケート調査を行い、活動へのご意見を伺ったり、共同で準備・練習・活動などを行ったりしている。

例年十月に行われる『大岡スポーツフェスティバル』では、四月から準備を開始し五月には保護者や地域へ向けてご意見や要望を伺うアンケートを実施している。どのようなスポーツフェスティバルを期待しているかを調べるだけでなく、共同で企画する活動を決めるためのものである。今年の場合、「ロープ・ファイト！99」「借り物競争」など多くの種目でふれあい種目を設定することができた（写真―3）。また、年度末に行われる『大岡文化祭』では、地域住民に講師になっていただいて「大岡ふれあい塾」を開催している（写真―4）。地域の方々が様々な特技を生かして、二十近くの講座を開き、子ども、保護者、そして教職員も一緒に参加して、日頃なかなか経験できない活動にチャレンジすることができた。

保護者や地域の方々の積極的な支援によって、参加者全員が一体となって共に活動を企画し、運営していく環境が定着しつつある。

❷―『代表委員会』への保護者・地域住民の参加

本校では、学校行事や学校生活全般を構成する場合、子どもたちの主体性や自発性を育むため、自らプランニングしていくことを重視している。トップダウン的に行事が決まったり、子どもたちの生活ルールが一方的に規制されることを排して、子どもたちが自らの思いを明確にもち、自分たちの行動に責任をもつように支援している。

学校生活を見つめ直し、よりよい自分たちの生活を築いていくためのルールも「大岡っ子憲章」として児童代表委員会で検討されている。「どのような学校を創り上げていくのか」「どのようなねらいが必要なのか」「どのようなルールを決めるべきか」などといった課題を子どもたちの立場からしっかりと考えていこうとしている。このような場合も、子どもたちだけが自分たちの都合だけで勝手にルールを決めるのではなく、保護者や地域の代表の方々のご意見を伺って、より望ましい規範づくりを進めようとしている。地域で共に生活するものとして、互いの立場を尊重しつつ、自分たちの学校生活をよりよくしていくための示唆を得ようとした。この取組みはただ単に先輩から学校での生活についてアドバイスいただくだけでなく、学校での取組みを多くの方々に理解していただき、常に学校と地域とが連携を図りながら活動を進めていく関係を強めていくための試みでもある。

5―『ひらかれた学校』での教育活動の共同化

地域での活動を学校教育に取り込んで、教育活動をより充実させていく試みにも積極的に取り組んでいる。学区のある本大岡地区では、青少年指導員等の方々のご指導のもとで小・中学生を対象とした茨城県での農業体験活動を実施しているが、本校でも児童・教職員が例年たくさん参加している。五月の田植えや秋の刈り取り、さらには十一月の『収穫祭』などは恒例になっている。これらの活動を学校教育にも取り込み、特に『収穫祭』は子どもだけでなく保護者・教職員もが参加して行われている（写真―5）。

学校の教育活動と地域の活動との垣根を低くして、子どもにとって価値ある活動を積極的に共同で取り組めるようにしている。地域の方々との連絡調整を十分に行って、本校の教育活動の充実を目指す努力を共同で行うことを目指している。

6―おわりに

本校は、横浜市教育委員会『わがまちの学校づくり支援事業』推進校として二年目の実践を進めているが、これからも、家庭・地域と共に教育活動を推進していくことを目指し、新しい学校のあるべき姿を模索していこうと考えている。子ども、家庭・地域、教職員の三者が互いに支え合い、助け合い、認め合いながら、より豊かな学校教育の創出を求め、それが広く「まち」にも影響を及ぼし、学びの共同体が創り上げられることを願っている。

＜市立大岡小学校教諭・研究主任＞

写真―3　大岡スポーツフェスティバル

写真―4　大岡ふれあい塾

写真―5　収穫祭